由亭馬琴著
傾城水滸
傳第四編
歌川國芳
上帙卷之上
へ13
3087
9

へ13 特
3087
9

曲亭馬琴著

冬の柳れ乱髪を暁迷る月を櫛とんで
はるく往方へ青嵐が河内路の寤寐床

唐山の梁山泊を
けいせいこでんこいーへん
日本の江鎮泊ふ

傾城水滸傳第四編の二

写して鳥の水鏡とも
誰姿見の画でもあれ

歌川國安画

一部八冊當春の新板御覽の通油町なる鶴屋が
彫當まゝ目貫の繪冊子

夏の柳の下涼を細谷川を帯ゆとて
結ぶ義烈とヨメカが浪速津を出船の纜

或予を問ふ曰傾城水滸傳は何の為ゆゑ作るや予答へて曰ふ作るの夫儒佛巫医百技の徒渡世の為ゆゑ
ある足らざる況稗官无根の談雑劇の時色ふるゆゑのみ。されども作
者の用心聊亦見るべきのあり。彼清の逸田叟が女仙列史の一書を見
ずや燕王の反逆を心誅せんと欲する為ゆゑ雄軍女兵を纂出して妖婦唐
賽児が勤王の小説一部とあるを彼則妖婦をもて正法とし燕軍を
もて外道とし迦葉れを水滸傳に比べ其の勸懲ふ廷逆あらざれ曲くもれを観べ亦この傾城
賊とするように比べその勸懲ふ廷逆あらざれ曲くもれを観べ亦この傾城
水滸の冊子も作者の用心知るべきのみ事を好てあらざるの評をべを許せば
きく私論憶談烏夜の銃炮ふ似る批評もあらとも毀誉褒貶を
爭ひの起る所吾ら避く通さんと欲も成らぬ識れと古人もいひけり彼物
論を齊うゆゑぬ鴨と斥鷃の類ゆ墮べ。曲亭馬琴戯識

鐵壺眼
白蛇
山盛阿剛

あらら引
芋方引三
篠芒朱良井
看板
歌傳
役者

耳掃
天下の
名人
陸奥の
なるる
鮫の
皮の
立ぬ
足駄の
このくるとく
屋久手が妻
阿井戸

屋久手虎右衛門速綱

梁間郡領
重門
砍合の
切あえの
きく
ゆき
大原木の
牙る
刃物三昧
行抜の
阿裡

左
身ハ
恋
細れど
ちろめこ棹乃
ふをひひめく
ちのび三ぢき
右
なりんぢち
庫ふ
たびく
質物之通
走書の安宅子
弾語の
義太吉

抜くくんてを
ぬきうめる
ぬうめる
質くら
宋公明村女君子
春雨の大葉子
あめ風
食の華やみぐるもん
閻八波々
鱈魚

二

柿

傾城大雙六 初編 狂斎人

江戸名物花見雙六 日本橋より振出 日本橋へ上り 彩色風の面白き 双六なり

風流三升もき 瀬川暁考彩工風之

晴雨両天傘 大形代銀十匁より下 小形同 ちかし

黒油美玄香 一色半八銅 右あぶら玄香 妙薬なり 製法売弘

蘭麝傳霊應丹功録 毒色代銀五匁 麝香法入

賣弘所 江戸室町二丁目 河内屋長兵衛

取次所 同 通油町 鶴屋喜右衛門